

「みんなの小噺プロジェクト」を用いた日本語教育実践

中内遥（関西大学大学院生）

1. 活動の背景

日本で生活している日本語学習者と関わっていると、言語能力に問題はなくても、自国と日本の文化的な違いによってトラブルが起きてしまったという経験談をよく耳にします。また、日本文化に興味を持ち、学習動機としている日本語学習者も多いです。このことから、筆者は文化と言語教育を組み合わせた授業実践について関心を持っていました。

そんな中、タイのチェンマイ大学で勤務されている先生から、チェンマイ大学日本研究センターをご紹介いただきました。同センターは人と人との交流を大切にし、言語教育にとどまらない総合的な日本研究を行っているとのこと、その理念に深く共感しました。そこで、チェンマイ大学日本研究センターにて、日本語学習の意欲を高めながら、学習者の異文化理解にもつながるような活動を行いたいと考え、本プログラムへの申請に至りました。

2. 本プロジェクトの目的

本活動を行うチェンマイ大学は、4年生時に日本でインターンシップに参加する学生が多く、中長期的に日本人とのやりとりを行える能力が必要となっています。その他にも、サランヤー他（2023）が行った 2018 年度にチェンマイ大学で日本語を学ぶ学生を対象としたアンケート調査によると、日本語学習を始めた動機として、「日本に行きたい」（81.7%）が最も多く挙げられています。日本語学習を継続する目的としては「日本に留学・進学したいから」（68.8%）や「日本で働きたいから」（65.2%）などが挙げられています。このことから、チェンマイ大学の学生の多くは何らかの形で日本に滞在することを目的に日本語を学習していることがうかがえます。

このように、チェンマイ大学には日本に長期滞在することを希望する学生が多いことから、学生

が日本滞在中のコミュニケーションを円滑に行えるような練習が必要な状態でした。そのためには、言語的な要素と文化的な要素を同時に学べる方法がいいと考えました。

そこで、本プログラムでは、日本人が持つユーモア・笑いという文化に接触でき、かつ、日本語の授業の一環として発話練習が行えるものとして落語や小噺を用いたワークショップを実施することにしました。日本の「ユーモア・笑い」文化は他にも様々ありますが、その中でも落語や小噺を選んだのは、伝統芸能でありながらも現代の日本人にも通じるユーモアがあるからです。

チェンマイ大学の学生は日本でのインターンシップを目標に学習を続けていますが、インターンシップまでの期間が長く、学習意欲が途中で落ちてしまう学生もいます。本活動では落語や小噺を通じて、日本人のユーモアについてだけでなく、上手や下手という概念や、座布団、扇子、着物などの小道具についても紹介します。このような日本の伝統的文化にも触れる機会を設けることで更に日本文化への関心を高め、また、実際に文化体験として小噺の実演を行うことで日本語学習への意欲を高められるのではないかと考えました。

3. プロジェクトのスケジュール

本活動は、渡航前にオンライン上でチェンマイ大学日本研究センターの先生方と打ち合わせを行いました。そこでは、会場の設備の案内や活動の流れ、活動中の役割分担について話し合いました。

渡航中の大まかなスケジュールは表 1 の通りです。

ヨップを行いました。

表 1 渡航中のスケジュール

年月日	活動内容
2024 年 7 月 28 日	チェンマイ着
7 月 30 日	チェンマイ大学案内 チェンマイ大学教員との交流
7 月 31 日	チェンマイ大学文化活動見学、 参加
8 月 1 日	ワークショップ打ち合わせ
8 月 2 日	チェンマイ大学授業見学
8 月 5 日	チェンマイ大学企業訪問参加、 交流
8 月 6 日	ワークショップ最終打ち合わせ
8 月 7 日	ワークショップ開催
8 月 8 日	ワークショップ参加者と交流
8 月 9 日	教員間でのワークショップにつ いての意見交換会
8 月 11 日	帰国

渡航後はチェンマイ大学日本研究センターの先生方とオンライン上で事後ミーティングを行い、活動のまとめと分析を行いました。

4. 活動内容

4-1 「みんなの小噺プロジェクト」について

本活動で参考にした「みんなの小噺プロジェクト」とは、「短い小噺を覚え、練習し、発表する場を通して、日本語習得のみならず幅広い日本文化への理解を推進する日本語教育プロジェクト」⁽¹⁾です。覚える小噺の教本（台本）は短くて簡単なもの（初級者向け）から長めで少し複雑なもの（上級者向け）までサイト上に掲載されており、参加者の日本語レベルに合わせた活動を行うことができます。

「みんなの小噺プロジェクト」は落語家や落語に精通した教師がいなくても指導ができるように、小噺のお手本や落語特有の仕草についての解説など、サイト上に様々な情報が提供されています。本活動でもこれらを参考にワークシ

4-2 ワークショップの内容

ワークショップの事前準備として、チェンマイ大学の先生方に協力していただき、日本語の授業内で落語や小噺について説明をしました。また、授業中に「みんなの小噺プロジェクト」サイト内の動画を見せたり、資料を用意して、ワークショップの参加を促しました。当日は 20 名の学生が参加しました。

ワークショップ当日は、まず、筆者が最初に小噺の手本として、「まんじゅうこわい」を改変した「ワッフルこわい」を実演しました。そのまま、座布団や扇子、手ぬぐいなどの小道具を紹介し、座り方、お辞儀の仕方を実演しました。

次に、手ぬぐいや扇子は様々なジェスチャーに使えることを説明し、ジェスチャークイズを行いました。他にも、小噺をわかりやすく、面白くするにはどうすればいいのか、簡単にポイントを説明しました。その際、穴抜きでメモができるハンドアウトも配布しました。

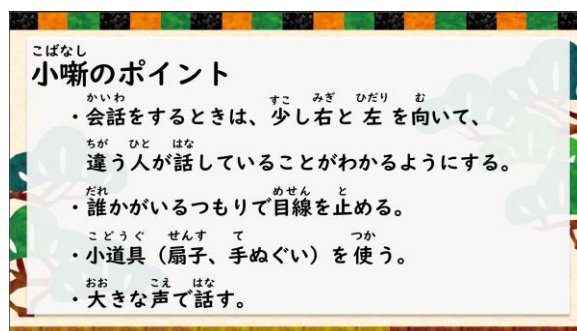


図 1 小噺の説明 ppt 例

その後、2～3 人のグループを作り、小噺の練習へ移りました。一人ずつではなくグループで行うことにしたのは、前に出て発表するのが苦手な学生にも楽しんで参加してもらいたかったことと、ワークショップの限られた時間内で全員に参加してもらいたかったことが理由です。グループの中で、前で小噺を発表する人と、小噺を面白くするために自分たちで考えた工夫を

発表する人に役割を分担しました。

グループ決めが終わった後、どの小噺を行うのか、こちらが用意したスクリプトから自由に学生に選んでももらいました。スクリプトは「みんなの小噺プロジェクト」サイト内から引用しました。以下は、学生が選択したスクリプト一覧です。

表2 実演小噺タイトルと対象レベル

レベル	タイトル
かんたん	「神様」
ふつう	「名画」
	「ラーメン屋」
	「どろぼう」
むずかしい	「登校拒否」

練習時間は約30分で、練習時間中はチェンマイ大学の先生方と協力して巡回を行い、面白くなる工夫や話し方を学生と相談しました。巡回は教員4名、手伝いに来てくれた日本人留学生1名と行い、どのグループでも必ず一人は日本人が様子を見ている状態でした。



図2 発表練習の様子

発表は1グループずつ前に出て、用意した高座の上で行いました。出囃子の音声を用意し、登場から退場まで落語家になりきって発表を行いました。他のグループの参加者は、面白いときには大きな声で笑い、終わったときには大きく拍手をするというルールで発表を聞きまし

た。発表者は緊張している様子でしたが、大きな声と大きな身振りで一生懸命演じていました。



図3 発表中の様子

発表後は、残りのメンバーが工夫した点などを解説しました。その後、質疑応答や感想を伝え合い、次のグループに交代しました。

全ての活動が終わった後、事後アンケートを行いました。結果は次節にまとめます。

5. ワークショップ事後アンケート結果

事後アンケートを行った目的は、落語や小噺という異文化への接触をそもそも楽しいと感じて取り組めたかどうかや、日本文化を学び、日本語学習の意欲向上につながったかどうかを調査することです。また、自由記述式の設問では、ワークショップについて「よかったこと」、「こまったこと」、今後行うワークショップについて、「日本語や日本文化について、どんなワークショップがあるとうれしいですか?」という項目に回答してもらい、参加者が感じるワークショップの満足度や改善点を調べました。

選択式アンケートは、設問ごとに回答数が違ったため、結果は「回答数/全回答数(%)」の形で示します(割合は小数点第二位を四捨五入)。以下はアンケートの選択式回答の結果をまとめたものです。

表3 事後アンケート(選択式)回答結果

①ワークショップは楽しかったですか？ 楽しかった…14件／14件（100%）
②ワークショップに参加して、日本の文化について知ることができましたか？ できた…13件／13件（100%）
③ワークショップに参加して、日本の文化をもっと知りたいと思いましたか？ 思った …12件／13件（92.3%） やや思った…1件／13件（7.7%）
④ワークショップに参加して、日本語の勉強をもっとがんばろうと思いましたか？ 思った …9件／12件（75%） やや思った …1件／12件（8.3%） どちらともいえない…1件／12件（8.3%） あまり思わなかった…1件／12件（8.3%）

以上の結果から、ワークショップ自体の満足度は高く、「参加して良かった」と考えている学生が多いことがわかります。「日本語の勉強をもっとがんばろうと思いましたか？」という項目を見ると回答のばらつきがあることから、活動に改善の余地はあるものの、学習意欲も概ね向上したと言えます。

続いて、自由記述式の回答です。

「よかったこと」では、「日本の『おもしろい話』を知ることができた（タイと日本の面白さの違いを知ることができた）」、「友達と笑い合っ活動ができて楽しかった」、「人前で小唄を披露することは普段ではできない体験だったので新鮮で楽しかった」という意見が見られました。

「こまったこと」では、ほとんど「ありません」という回答でしたが、1件、「発表の準備の時間が短くて、緊張しました」という意見がありました。

「日本語や日本文化について、どんなワークショップがあるとうれしいですか？」で記入された意見には、「今日のような（あまりポピュラーではない）日本文化の体験がしたい」という意見が多かったです。具体的な意見では、「演歌」、「日本料理」、「小説を書く」、「和楽器」、

「生け花」、「歌舞伎」というものが見られました。

この結果やワークショップ中の様子から推察すると、チェンマイ大学の学生は日本の文化を学ぶことに非常に興味を持っており、楽しんで小唄に取り組めたようです。また、アニメや音楽などのポップカルチャーは自分たちで触れることができますが、伝統文化や何かを製作する活動は指導者が必要なので、ワークショップで扱ってほしいという意見が出たのだと考えます。

6. ワークショップ事後ミーティング

事後アンケートを受けて、チェンマイ大学の先生方と事後ミーティングを行いました。アンケート結果を共有し、いくつか見つかった課題について話し合いました。

まず、発表している学生の姿をビデオで録画しておいた方がよかったという意見が出ました。録画することで後から見返すことができ、自分の日本語の発音の振り返りになったのではないかと思います。また、小唄の性質上、多少日本語が荒くても勢いで発表を終わらせることができる上に、フィードバックもしにくいいため、教師側のやりやすさのためにも録画した方がいいのではないかという意見が出ました。

それと関連して、録画するなら全員が発表できた方がよかったという意見が出ました。強制的に発表させることで練習になるし、満足度も高くなったのではないかとのことでした。これは心理的ハードルと学習効果のバランスを考える必要があると思います。

次に、アンケート結果にあった「時間が短かった」という回答について、事前にスクリプトを配布し、ワークショップまでに練習しておくようにしてはどうかという意見が出ました。このワークショップでは、練習もいっしょに行い、発音や演技の指導をすることが重要な要素だと考えていましたが、確かに、内容だけは先に覚えておいて、細かい指導をワークショップ当日に行うようにすることも可能だったと思い

ました。

ワークショップのよかった点では、持ち帰りができるハンドアウト（スクリプトも含む）があったことが挙げられました。また、全体的に雰囲気がよく、和気あいあいと活動ができたことも挙げられました。

7. 得られた成果と今後に向けて

本活動は、日本文化と日本語学習を組み合わせた実践を行いました。一度のワークショップでは会話能力の向上はあまり大きくありませんでしたが、小断を通じて発話練習を楽しく行うことは達成できました。また、本活動の目的であった「日本の笑い文化」についての学びや関心を高めることができました。

本活動から、筆者は日本文化と日本語学習を組み合わせた実践の必要性和困難さを学びました。

事後アンケートでもあったように、日本とタイでは「笑い」についての考え方が違う点があります。それを知ることができるのは学生にと

って意義があったと感じました。また、学生の姿を見て、文化体験と共に日本語学習を行うことによって、「練習した日本語を使って活動ができる」という達成感から、学習意欲の向上に繋がることを実感しました。

一方、文化体験を指導する際、指導者が扱う文化に精通している必要があること、どこまで細かく教える必要があるのかという匙加減の難しさ、長期間を見据えて行う必要があることなど、本活動のような実践を行う上での困難さが判明したことも成果の一つだと思います。

他にも、反省点としてフィードバックの方法や活動手順などが挙がりました。これらを知ることができたのも、チェンマイ大学日本研究センターの先生方のご協力のもと、本活動を行えたからこそだと感じています。今後は、今回学んだことを生かし、言語的な異文化を効果的に学ぶことができる授業実践について更に考察を行っていきたいと思います。

注

- (1) 国際交流基金「みんなの小断プロジェクト」<<https://one-taste.org/kobanashi/>>（参照 2024-05-08）

参考文献

- (1) 国際交流基金「みんなの小断プロジェクト」<<https://one-taste.org/kobanashi/>>（参照 2024-05-08）
- (2) サランヤーコンジット・横堀ひかる・吉田直子・ベーンジャーン ジャイサイ デア アルスラニアン（2023）「北部タイ日本語教育における高校大学間のアーティキュレーションの課題 ～上北部タイ高校の日本語学習者のニーズ・レディネス調査から～」『タイ日研究ネットワーク Thailand 研究論集』4号, pp. 139-155
- (3) 中内遥（2024）「自慢談話における言語行動の日韓対照研究」『国文学』108号, pp. 200-214
- (4) 畑佐一味・久保田佐由里（2009）「一人で演じる日本語会話：小断プロジェクトの実践報告」『Proceedings of the 16th Princeton Japanese Pedagogy Forum』, pp. 20-31,